

# 金光大神の生涯が舞台に

金光さんが舞台になった。幕末、維新の動乱期、備中国(岡山県西部)で平凡な農民として生活を営み「神をとらえた」金光教祖、生神金光大神(赤沢治、一八一四—一八八三)。晩年の没後百年を前に、その生涯を描いた劇「あいかげよ—金光大神の生涯」が十二日から大阪・道頓堀の朝日座で上演される。主演は信者の中村扇雀さん。かつて「天子様も人間」と國家神道への從属を拒否し、どこまでも「天地の道理」に基づいた内面的救済を重視、政治に対し中立を貫いた金光さんは、いまの世にどうよみがえるのだろうか。(池田 知隆記者)



「内面的な世界と舞台をどうつなぐか、責任感でいっばい」と語る演出の竹内さん

「金光さんは人間が欲を去り、村の人たちは恐ろしい金神(こんじん)のたたりと恐れながら、金光さんはおかげを受けるとして、「滅天に生きる人間を神が苦しめるはずがなく、人間が神の本位の教えを求めたとき、神はそれに応じ、助ける。同じ時期に、農民の間にも生まれ、発展した天理教が、神による理想世界の実現という世直し願望を秘めていたのと対照的に、金光教はどこまでも地道に内面的な救済を求め続けた。竹内さんは「要するに、信仰深いお百姓さんです」。金光さんは、幹部たちの動きをたしなめ、最後まで國家神道への從属を拒否し、信仰を個人の内面の営みとして貫いた。

備國神への公式参拝、圓覚化への動きが強まっている現在、よみがえった金光さんは、さて、何をまず言うだろうか。

竹内さんはいう。「金光さんの死後、二代、三代となるうち、政治的に愛護を強いられていく。政治とどうも一線を引いた金光さんの生き方は、現代にも大きな意味がありますよ」

## 心の救済—政治に中立を貫く

「現代へ大きな意味」演出の 竹内 伸光さん

金光さんの舞台化に取り組んだ演出家、竹内伸光さん。彼は、上頭を控え、緊張感に押しつぶされそうない毎日だ。宝塚歌劇団、梅田コマ劇場などでショー、ミュージカルを手がけてきた故郷田一夫氏の門下生。宗教と舞台の大衆性。「宗教の持つ内面的な世界と、舞台の大衆性をどう下ラマの中で結びつけるか、責任感でいっばいです。まして、私は不良信者ですから」

「そのとき、母に、信心が足りんからじゃ」といわれ、何十年かぶりに教会に行っただけです。苦しいときの神頼み。すると、おかげ(現世利益)の有る無しは、実意丁寧に信仰しているかどうか、人間の問題だ、と教えられ、涙がでるほど感激したんです。おまえは、ほんとうに誠意を尽くしているか、といわれ

それから教祖の本を読みあさった。猛烈に舞台化の意欲がわいた。知り合いのプロダクション社長が、たまたま金光教大阪教長と親しくトントン拍子に上頭の話は進んだ。信者の扇雀さんは話を聞き「ぜひ、金

### 宗教人生

「神は人を生かす」

「神は人を生かす」というのが、金光教の出版物からたどってみると、

江戸末期、現在の岡山県浅口郡の農家、二男として生まれた。十二歳で養子に



「初代扇雀は劇場に社(やしろ)をつくり、合掌してから舞台に立つほどの熱心な信者。私は初代を大崇拜しており、その生活すべてを知りたいので、いまでも金光教の『ご神米』(神)に取り次いだことを示す米をいたたき、鏡台をなすに置いています。金光さんを通して、初代の信仰心がど

「とにかく信仰心が強

ただ、因縁を感じますね」 出されたが、実家、養家ともみれば、金光さんほど芝居三、四歳のころ、村の庄屋になりたくて宗教家もいなくて、書き、そろばんをい。きわめて平凡な一農民で、カリスマ性はない。それだけに、ただただ土を耕す、信心深

「人間の深みを」 扇雀さん

「この舞台は信者だけでなく、一般のお客さんに見

「とにかかく信仰心が強

「とにかかく信仰心が強